



1

お話しの内容

1. 私の目(福祉社会学)でみる「災害」
2. 「倉敷市真備町」「益城町」の取り組みからの学び
3. まとめにかえて(Café de Monkの役割)

(15分)

二月十二日
日直吉田

2

自己紹介

本間照雄 蟹座 O型 中新田町 1950(昭和25)年 寅年生まれ

3

3

東日本大震災対応時の様子 (2011/03/31)



4



5



被災地行政の支援 2011 (H23) .04~2014 (H26) .03

6



7



8



滞在型生活支援員(南三陸町志津川地区)

9



急ピッチ進められている災害公営住宅整備計画2012-11-22

10



11



12

**東日本大震災
宮城県民 100
の提言**

ともに生きる
想いを紡ぐ言霊



学校南側にある裏山から見下ろす大川小学校

宮城県サポートセンター支援事務所

私達の今日は、震災で犠牲となり、
もっと生きたかった人達の今日でもあります。
一人を超える犠牲者の方々の分まで、私達はこの命を大切にします。
そして、これからも町の復興に貢献できるよう、
20名全員がそれぞれの道で全力で邁進することを誓います。

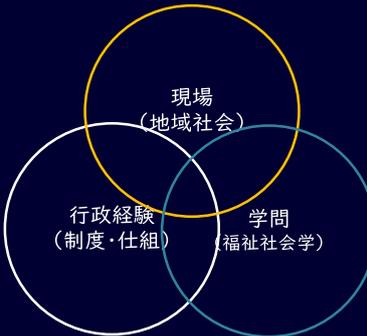
2012(平成24)年3月12日 南三陸町立戸倉中学校 卒業式
卒業生代表 小野寺翔くん、客辞(抜粋)

この冊子は令和2年度宮城県NPO等による心の復興支援事業補助金
により作成しております

宮城県サポートセンター支援事務所編,2011『東日本大震災宮城県民100の提言』東北プリント。

13

基本的な姿勢



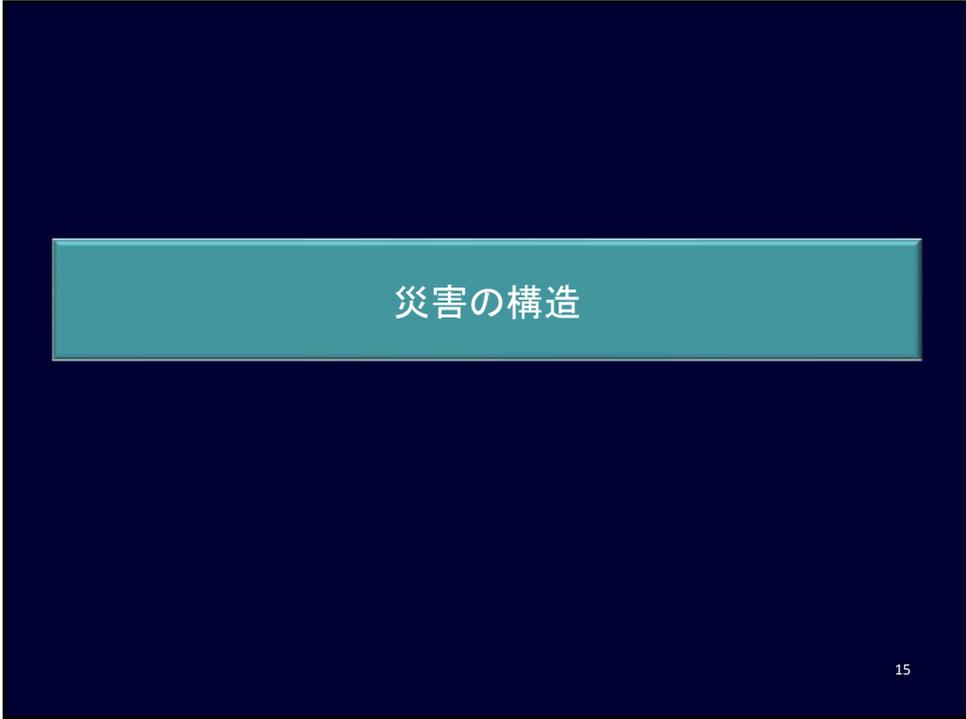
現場
(地域社会)

行政経験
(制度・仕組)

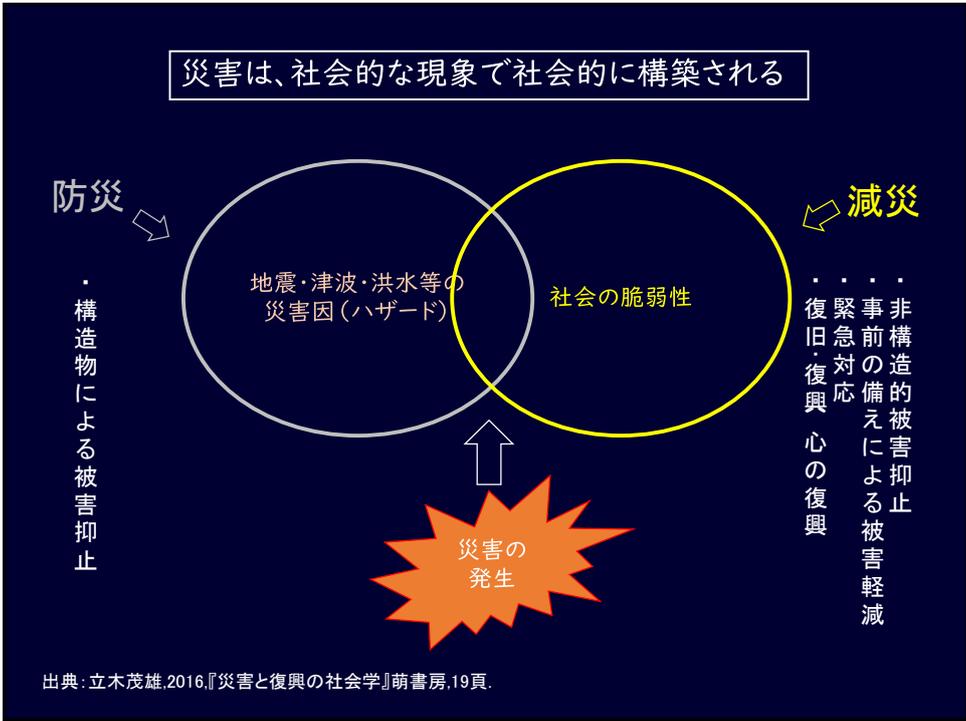
学問
(福祉社会学)

この三つを重ね合わせることで見えるてくる
世界を、愚直に追いかけていきたい。

14



15



16

災害による二つの喪失

目に見える喪失
(形あるものの喪失)目に見えない喪失
(形のない喪失)

多くの命、役場庁舎、家屋、
家族、友人、ペット、仕事、
コミュニティ(隣近所)
思い出、生活習慣、
伝統行事、商店街の活気、
等々が失われた。

行政・商業の中心地
南三陸町志津川地区(2011/05/10)

17

復興に向けた支援の仕方

目に見える喪失
(形あるものの喪失)

- ・一般的には、時間的経過に沿って、復旧・復興の支援内容を変えながら行っていく。
- ・各「ステージ」を意識して、**直線的**に行われている。
- ・これは、形あるものの喪失への支援として効果的で有り、目に見えてわかりやすい。

目に見えない喪失
(形のない喪失)

- ・一方の目に見えない喪失は、時間の経過に合わせた直線的な支援は難しい。
- ・なぜなら、被災者は、行きつ戻りつの「**ゆらぎ**」の中にある。
- ・揺れる心情に起因する様々な生きずらさに寄り添った支援が求められる。

被災地では、この二つの支援、「直線型支援」と「スパイラル型支援」との
組合せが大切である。

18

「倉敷市真備町」「益城町」の取り組み からの学び

19

19

倉敷市真備町 (中国地方臨床宗教師会・倉敷市社会福祉協議会)

- 福祉とは、「**ふだんの** **くらしの** **しあわせ**」を支えること。
 - ・地域住民の何気ない日常を支えるのが「福祉」といい、全ての人々が福祉の対象。
 - ・地域社会に軸足をおいている(暮らしを支える)。
 - ・明日に希望の持てる活気のある生活を目指している(困り毎だけではない)。
- 住み慣れた地域社会にこそ「あなたらしく」居られる場所がある。
 - ・様々な社会関係及び生活環境に着目している。



「つながり」(社会関係)こそが究極の備え「真の備」(真備)

=被災者の「ゆらぎ」に対して=

- ◇臨床宗教師の「変わらない」「長い時間軸」を伴った寄り添い(変わらない)。安心
- ◇地域にある生活に密接な社会資源に精通した社協による寄り添い(臨機応変)。安定
- ◇Café de Monkと社協の協働により、被災者の「本音」と向き合える場・機会をつくる。

20

益城町（九州臨床宗教師会・広崎仮設団地自治会）

- 馴染みのないCafé de Monkを知ってもらう。
 - ・被災者の振るまい・言葉に寄り添い十四の心で聴く（傾聴）
 - “姿から感じおもいを聴く”→“泣く”（回復過程）を経て“明日への物語を描く”
- 行政・自治会との信頼関係構築と協働
 - ・居場所づくり
 - 行きたくなる場所・予定に入れる場所・他者と関わる場所・泣き笑い出来る場所
 - 癒やしの空間“カフェ・デ・モンク”を開き、心とお腹を満たし、笑顔を取り戻す
 - ・徹底した「一人ひとり」への寄り添い
 - 常に、一人対一人に気を配り、会話の継続に腐心した
 - 会話がより深くなり、それに呼応して、自己への見つめ直しになる（自律支援）。
- 支援者への支援
 - ・被災者の日常に接している仮設住宅自治会長（感情労働）等への支援
 - 臨床宗教師会の訪問頻度を補う（1日対29日/月）
 - 地元人財の育成にも通じる
 - “自治会長になって良かった”
 - “もし仮設が必要な事が生じたら「自治会長」”を志願する

21

21

まとめにかえて（Café de Monkの役割）

22

22

まとめにかえて Cafe de Monkへの期待

本事例の被災者支援は、被災者の「ゆらぎへの寄り添い」。

- ◇被災者は、臨床宗教師に対して、
 - ・何気ない所作を伴った佇まいの中に「役割期待」を見いだしている。
 - ・社会化過程で学んだ「僧侶像」(徳を積んだ人)で接している。
 - ・過去(後悔)と現在(納得)と未来(希望)のはしわたしを行い、「変わらない」「長い時間軸」による「穏やかさ」「安心感」を取り戻している。
- ◇社会福祉協議会は、
 - ・個別具体の社会資源の提供により、「被災者」から「地域で暮らしを営む人」への緩やかな転換を図っている。
- ◇応急仮設住宅自治会長は、
 - ・「受援力」(Cafe de Monk(臨床宗教師)との関わり)により被災者に笑顔を取り戻し、自分の職責に喜びを見だし自己肯定感を高めた。

(註)役割期待 参加者が相互作用を行う他者(僧侶?)と関わる時、参加者は、他者(僧侶?)にその地位にふさわし役割の遂行を期待する。
(引用文献) 森下伸也,2000『社会学がわかる時点』日本実業出版社.

23

本事例で得た三つの知見

- 1 Cafe de Monkの活動は、他機関との協働を必須とし、その事で地元社会資源を生かした、持続可能性のある支援を担保できる。
- 2 Cafe de Monkの活動は、支援者支援の役割を担い、その事で地元人財の育成が図られ、地域力向上に寄与できる。
- 3 Cafe de Monkの活動は、対象者の回復過程に関わることで、対象者の未来に関わる人生の物語を描く、自律支援に寄り添える。

24

臨床宗教師の活動 Cafe de Monk

地元の社会資源との協働を必須とし、そのことで初めて地域での生活を支えられる。

Community based social work

地域社会に軸足を置いて、地域住民と共に、地域社会の課題として取り組む



CSW er

こうしたことを意識した活動も大切なのではないか!

25



質問・お叱りは以下にお寄せ下さい

E-mail : welfare0622@yahoo.co.jp

HP・Blog : <https://welfare0622.org/>

これでお話は終わりです。ご静聴有り難うございました。

26